『文学碑』をたずねて　その４

文化財見学シリーズ56・57・58で「『文学碑』をたずねて」を執筆してきたが、その後の踏査でいくつかの新しい資料を収集することができた。前回割愛したものも含めてここに紹介し、再度文学碑の良さをアピールした次第である。姫路市内には、まだまだ眠っている文学碑が存在していると思われるので今後とも踏査を続けていきたいと思っている。

１．太市･飾西･曽左地域

①伝教大師最澄文学碑その１（姫路市書写･書写山円教寺参道）

比叡山延暦寺を建立し、日本天台宗を開祖するとともに「顕戒論」、「山家学生式」などを著わした伝教大師最澄の文学碑。最澄の著「山家学生式」は「天台法華宗年分学生式」、「観奨天台宗年分学生式」、「天台法華宗年分度者回小向大式」の三首からなり、その内の一つ「天台法華宗年分学生式」の中に見られる「国宝とは何物ぞ、宝とは道心なり、道心ある人を名づけて国宝と為す。故に古人の言く、径寸十枚是れ国宝に非ず、一隅を照らす。此れ則ち国宝なりと」の一節を記している。寛和２年（９８６）花山法皇より円教寺の寺号を賜ってから１，０００年を記念して昭和６１年６月に「白珠講」が建立した。

書は円教寺百四十世大樹孝啓。

『伝教大師聖句

一隅を照らす　これ則ち　国宝なり

円教寺百四十世孝啓謹写　施主白珠講』

①伝教大師最澄文学碑その１

②伝教大師最澄文学碑その２（姫路市書写･書写山円教寺参道）

同じく「天台法華宗年分学生式」の中の一節を記した文学碑。平成９年１０月吉日に姫路市在住の髙馬玲子、岸本美子が施主となって建立した。書は天台座主大僧正魚稀。

『天台法華年分学生式

一隅を照らす　　天台座主大僧正魚稀』

②伝教大師最澄文学碑その２

③伝教大師最澄文学碑その３（姫路市書写･書写山円教寺参道）

伝教大師最澄の言葉を記した文学碑。「ヤマトヤシキ」創立６０周年、前身の「米田まけん堂」創立１００周年を記念して「ヤマトヤシキ」社長米田徳夫が平成１８年１０月吉祥日に建立した。書は書写山主大樹孝啓。右に説明文が建立されている。

左『自利･利他　圓満　　書写山主孝啓謹書』

右『自利･利他　円満

比叡山を開いた伝教大師最澄上人の言葉と伝えられています。伝教大師は「山家学生式」において「国宝とは、道を修めようとする道心を持つ人そのものであり、己を忘れて他を利する実践が出来る人である」と説いています。他人への思いやりは自分自身のこころを成長させるためにするものであるという教訓のことばです。ひとりの「いのち」が、他の一切の「いのち」と深いところでつながっていることに気づいたとき、ひとは自他の「いのち」の尊厳を自覚でき、自他の調和の大切さに気づきます。その尊い「いのち」を利他実現に向けて燃焼させること、これが「自利利他」の意味と教えています。』

③伝教大師最澄文学碑その３

③伝教大師最澄文学碑その３

④山本孝仙句碑（姫路市書写　書写山円教寺摩尼殿東）

日本伝統俳句協会会員。俳句結社「貝の会」同人で句集「はりま野」などを著わした姫路市在住の山本孝仙の句碑。書写山中心の句を多く発表している。書は書写山主大樹孝啓。

『はりま野の　くさと思へぬ　都草　　孝仙　書写山主孝啓書』

④山本孝仙句碑

⑤椎名麟三文学碑その１（姫路市書写東坂）

「深夜の酒宴」・「美しい女」・「自由の彼方で」・「菱の花」などの作品、ミュージカル「姫山物語」の上演で知られている椎名麟三の文学碑。「菱の花」の中の一節が記されている。２００９年３月、円教寺女人堂に向かう石段際の生家前に、書写中学校区地域夢プラン実行委員会、椎名麟三を語る会によって建立された。

表『椎名麟三文学碑

私の家は、女人堂という寺へ行く石段のたもとに建てられていた。私は、学校から帰って来るとそこでひとりで遊んでいるより仕方がなかったのであるが、その石段への寺へ用事のある村人やときたまやって来る参詣人たちが上ったり降りたりした。

（略）その石段は、四十三段あった。私は、この事実を誰かに教えたくてたまらなかったのだが、誰にも話すことができなかったのだ。

「菱の花」（１９６０年６月）より
書写中学校区地域夢プラン実行委員会
椎名麟三を語る会
設立　２００９年３月』

裏『椎名麟三（１９１１～７３）

⑤椎名麟三文学碑（生家前）

本名大坪昇。明治４４年１０月１日旧曽左村東坂の母方の実家で生まれる。父熊次、母みすの長男。父は大阪で警察官をしていた。

小学３年冬曽左小学校に転校。母が設計し、父が新築した家に妹弟と５年余り暮らす。近くの日本画家福本白宇の影響を受ける。旧姫路中学（現姫路西高校）に入学するも、父の仕送りが絶え、３年生の春父を訪ねるが拒まれ、そのまま家出、辛酸を舐める。

昭和４年宇治川電鉄（現山陽電鉄）に入社。非合法の労働運動のため投獄され、過酷な拷問を受ける。

ニイチェを利用して転向、出所。戦後「深夜の酒宴」で文壇へ登場。第一次戦後派の第一人者となる。昭和２５年受洗。名作自伝小説「自由の彼方で」・「美しい女」（芸術選奨文部大臣賞）を執筆中２８年ぶりに帰郷。昭和３８年病身を顧みず、文化団体を総結集して「姫山物語」を上演。その郷土愛に市民が感動した。

昭和４８年３月２８日病没。６２歳。生誕１００年目前を記念し、椎名文学が末長く郷土の人々の心に残ることを願いここに記念碑を建立するものである。

設立　２００９年３月２８日』

⑤椎名麟三文学碑

⑤椎名麟三文学碑（裏）

尚、姫路市ではないが、椎名麟三が２年あまり山陽電鉄の前身宇治川電鉄の車掌をしていた関係で、それを記念して山陽電鉄株式会社が本社前に１９８５年３月に建設した文学碑をここに紹介しておく。「自由の彼方で」の一節が記されている。

『考えて見れば人間の自由が僕の一生の課題であるらしい
椎名麟三
「自由の彼方で」のあとがきより』

左横には椎名麟三の経歴が刻まれている。
是非足を運んでほしい。場所は山陽電鉄西代駅下車。

⑤椎名麟三文学碑（山電本社前）

⑥清水公照文学碑（姫路市書写　姫路市書写の里・美術工芸館竹林園内）

⑥清水公照文学碑

現姫路市六角出身で若くして東大寺に入寺。昭和５０年から管長を務めながら、泥仏、書、墨彩画、陶器などの製作を行うとともに、大仏殿修理にも尽力した清水公照の文学碑。著に「華厳宗入門」、「おかげさんの心」、「こころの歳時記」などがある。晩年までの数々の業績により、平成５年に姫路市芸術文化賞文化芸術大賞を受賞したが、平成１１年に死去した。この文学碑は平成１２年４月吉日に清水公照師の遺徳を偲ぶ会が建立し、死を惜しんだ。

『遊戯三昧

五風十雨　公照

ごふうじゅううう

五日に一度風が吹き十日に一度雨が降ること

風雨その時を得て農作上好都合と天下泰平なこと』

裏には、清水俊、清水千深、清水文美を中心とした清水公照師の遺徳を偲ぶ会のメンバー名とともに清水千深書で

『風が笹に囁きかけるその葉音が皆さんのお話に聞こえて公照師は毎日笑顔で座っておられます。そんな書写の里で師が生み出された如来を携えて、ここに悠久の時を得られました。

皆様のお心を頂かれて喜こびを味わっておられます。ありがとうございました。　千深書』

と記されている。尚、碑の存在する姫路市書写の里・美術工芸館には清水公照の書画、泥仏、陶器などが数多く陳列されている。また師は当館の名誉館長でもあった。

２．砥堀・水上・城北地域

⑦在原業平歌碑その１（姫路市砥堀一区）

⑦在原業平歌碑その１

「姫路市史第三巻史料編」記載の「播州増位山随願寺集記」の中に見られる在原業平の和歌を記した文学碑。平成２０年１２月吉日に砥堀一区自治会が建立した。砥堀一区地蔵堂横に建立されている。

『糸の細道

播磨路や　糸の細道　わけゆけば　砥堀に見ゆる　有明けの月

砥堀の集落から有明山に通じる道は、在原業平により“糸の細道”と歌われた道です。有明山の上に明け方まで残った月は、この道を朝はやく通った昔の人達の心をなごませたことでしょう。

貞観１７年（８７５）、９月の随願寺の山王祭礼の時、勅旨として在原業平が随願寺に来た。一日、有明の峯に遊び和歌を詠す。

和歌を詠んだ時刻は、午前６時ごろである。　　糸の細道⇒そこ

平成２０年１２月吉日

砥堀一区自治会』

⑧在原業平歌碑その２

⑧在原業平歌碑その２（姫路市白国　増位山東尾根ハイキングコース増位山頂上展望台）

「播磨鑑・飾東郡の部」に記載されている在原業平の和歌の碑。

『はりまなる　糸の細道　わけ行ば　とおりに見ゆる　有明けのそら　業平』

尚、「播州増位山随願寺集記」では１句が「播磨路や」、５句が「有明の月」になっている。

⑨西行法師歌碑（姫路市白国　増位山東尾根ハイキングコース増位山頂上展望台）

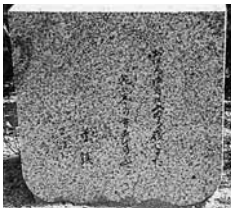
⑨西行法師歌碑

「播磨鑑・飾東郡の部」に記載されている西行法師の和歌の碑。

『天照らす　神さへここに　有明の　月もさへぬる　秋の夜のそら　西行法師』

尚、「播州増位山随願寺集記」では、西行法師が建久４年（１１９３）８月１５夜に詠んだ和歌として『天照らす　神さへここに　有明の　月もさやけき　秋の夜のそら』になっている。

⑩慈鎮歌碑（姫路市白国　増位山東尾根ハイキングコース尾根上）


⑩慈鎮歌碑

「拾玉集」、「愚管抄」の著者慈円の和歌の碑。１２３７年の１３回忌に四条天皇より「慈鎮」の諡を賜った。この和歌は「拾玉集」、「播磨鑑・飾東郡の部」に記載されている。

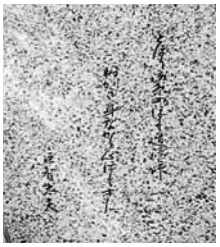
『おぼろ成　月は入ぬる　嶺にまた　花に光の　有あけの山　慈鎮』

⑪巨智太夫歌碑（姫路市白国　増位山東尾根ハイキングコース尾根上）

今宿に存在する「昌楽寺」の前身を建立した巨智太夫延昌の和歌の碑。「播磨鑑・飾東郡の部」に記載されている。

『とほり成　糸の細道　篠峠　わかき身ながら　心ぼそきに　巨智太夫』

尚、「播磨鑑・神東郡の部」は、５句が「心ぼそきぞ」に、名が巨勢太夫となっている。



⑪巨智太夫歌碑

⑫吉田豊信書文学碑（姫路市　広嶺山）

広嶺山に存在する文学碑。１９８０年３月２７日に姫路大手前ライオンズクラブが建立した。書は元姫路市長吉田豊信。

『一輪の花にも無限の愛を　姫路市長吉田豊信書』

⑫吉田豊信書文学碑

⑬桃生句碑（姫路市白国　念仏堂境内）

随願寺念仏堂の境内に建立されている桃生の句碑。大変読みにくいため木村栄次著「いしぶみ紀行」（のじぎく文庫）を参考にした。

『咲き残り　散りのこりして　花七日　　桃生』

⑬桃生句碑

３．飾磨地域

⑭北白川房子歌碑（姫路市飾磨区恵美酒　恵美酒宮天満神社境内）

明治天皇の第７女で伊勢皇大神宮祭主を務めた北白川房子の歌碑。昭和３３年正月に飾磨婦人会橋東支部が再建した。

『久方の　月の桂も　折るばかり　家の風をも　吹かせてしかな

神宮祭主房子内親王書』

⑭北白川房子歌碑

⑮菅公壱千壱百年社殿新築記念碑（姫路市飾磨区恵美酒　恵美酒宮天満神社境内）

平成１５年に岡田隆寛が建立した。

『心だに　まことの道に　かなひなば　いのらずとても　神や守らむ』

⑮菅公壱千壱百年社殿新築記念碑

⑯井上白文地句碑（姫路市飾磨区中島　妙諦寺境内）

現福井県敦賀市出身でのち姫路の妙諦寺に移住。大正１３年から俳句をはじめ、昭和８年に「京大俳句」を創刊。新興俳句の創作に情熱を傾けた井上白文地の句碑。平成１７年３月吉祥日に究竟山妙諦寺第十世井上隆啓が、太平洋戦争後ソ連軍の捕虜となり、解放後の昭和２１年に消息を断った井上白文地をいとおしみ建立した。書は智岳院日暉。

『白文地句碑　　昭和１２年「京大俳句」より

我講義　軍靴の音に　たゝかれたり

智岳院日暉書』

⑯井上白文地句碑

⑯井上白文地句碑（裏）

裏には「井上白文地遺集」より記した井上白文地の経歴とともに

『わが地より　ああいとおしや　白文地

平成１７年３月吉祥日建之

究竟山妙諦寺第十世井上隆啓　合掌』

と刻まれている。

⑰梅澤ゆきゑ文学碑（姫路市飾磨区英賀　英賀神社境内）

表『至誠通神恩頼無窮』

裏『うぶすなの尊きみいつゐやびつつ

霜朝の静かなる神苑けふも掃く

喜寿奉賽建立　昭和５８年霜月吉日　英賀梅澤ゆきゑ』

⑰梅澤ゆきゑ文学碑

■編　集　　松　岡　秀　樹（姫路市文化財嘱託調査員）